

第146回鶴見大学図書館貴重書展 「川端康成・交友と国際化の一端」  
ごあいさつ

川端康成（明治三十二（一八九九）年～昭和四十七（一九七二）年）は寡黙でもの静かな人となりだったと言われるが、一方で、友人その他文壇の人々からの信頼が篤かった。伊豆湯ヶ島、大森、軽井沢、鎌倉など、川端の居住した土地はいつも文学者たちが集まっていた。

今回は、そうした川端康成の交友関係の一端を詳しく知ることのできる未公開書簡などを展示した。

川端康成は、菊池寛が大正十二年一月に創刊した「文芸春秋」に当初から関わり、文芸春秋社とは生涯深い関係にあった。展示の中河与一宛書簡は、「文芸春秋」「オール読物」の編集長を務めた菅忠雄への見舞金を取りまとめる川端の姿が垣間見える。気配りの行き届いた文面である。

戦後まもなくの昭和二十三年、川端は日本ペンクラブ会長に就任し、昭和四十年まで十八年間会長職を務めた。その間の最も重要な出来事は、昭和三十二年九月、アジアで最初の国際ペンクラブ大会が東京・京都で開催され、外国代表一七一名、日本ペン会員二〇八名が参加して非常に成功をおさめたことである。昭和三十二年の川端の渡欧はその準備のためであった。

展示資料からは、ドイツ滞在時の算段を『千羽鶴』を独訳した八代佐地子が精力的に行ったことが知られる。八代は川端作品をいち早く翻訳し、ヨーロッパに紹介した。東山魁夷、シンチンガー、ロゲンドルフなど、川端の多彩な交友関係がうかがえる。

日本ペンクラブは昭和二十八年日本文学翻訳委員会を立ち上げ、日本文学を世界に紹介する活動にも努めた。結果として、これらの活動は昭和四十三年のノーベル文学賞の受賞につながっている。

なお、本企画に際しては、文学部・富岡悦子教授、高田信敬教授、短期大学部・山田吉郎教授に御尽力いただいた。厚く御礼申し上げます。

文学部日本文学科教授

片山 倫太郎

## 展示書目

1. 八代佐地子宛 川端康成書簡 昭和30年〔1955〕5月8日
  2. 複写展示 川端康成宛 東山魁夷書簡 昭和30年〔1955〕6月22日  
出典…『川端康成と東山魁夷…響きあう美の世界』求龍堂 平成18年 16-21頁
  3. 複写展示 川端康成宛 東山魁夷書簡 昭和31年〔1956〕6月24日  
出典…『川端康成と東山魁夷…響きあう美の世界』求龍堂 平成18年 16-21頁
  4. 八代佐地子宛 川端康成書簡 昭和31年〔1956〕7月1日
  5. 複写展示 川端康成宛 東山魁夷書簡 昭和31年〔1957〕7月4日  
出典…『川端康成と東山魁夷…響きあう美の世界』求龍堂 平成18年 16-21頁
  6. 複写展示 川端康成宛 東山魁夷書簡 昭和32年〔1958〕1月23日  
出典…『川端康成と東山魁夷…響きあう美の世界』求龍堂 平成18年 16-21頁
  7. 川端康成宛 八代佐知子書簡下書き 昭和32年3月上旬
  8. 八代佐地子宛 川端康成書簡 昭和32年〔1957〕3月20日
  9. 川端康成宛 八代佐知子書簡下書き 昭和32年3月下旬
  10. 八代佐地子宛 川端康成書簡 昭和33年〔1958〕8月12日
  11. 『千羽鶴』ドイツ語翻訳版 川端康成著 八代佐地子訳 カールハンザー社 1956年
  12. 八代佐知子 ドイツ語資料 1956-1957年
  13. 『雪国』 川端康成著 新潮社 1956年
  14. 『雪国』 ドイツ語翻訳版 川端康成著 オスカー・ベンル訳 ハンザー社 1957年
  15. 中河與一宛 川端康成書簡 昭和12年〔1937〕5月15日
- 参考
- 複写展示 『川端康成全集』第24巻 新潮社 昭和57年 508-509、638-639頁  
複写展示 『川端康成全集』補巻2 新潮社 昭和59年 88-89、256-257頁  
『定本図録川端康成』 世界文化社 昭和48年

## 八代佐地子関連資料解説

八代佐地子（やつしろ さちこ）は、川端康成『千羽鶴』（昭和二十七（一九五二）年十月、筑摩書房刊）をドイツ語に翻訳し、ドイツ・カールハンザー社から昭和三十一（一九五六）年に出版した。

展示の同書には、東山魁夷による挿絵が三枚あり、巻末には Robert Schinzinger（ロバート・シンチンガー）のエピローグが付されている。

八代佐地子のプロフィールは現在のところ不明である。国立国会図書館の蔵書目録によれば、他に、三島由紀夫『宴のあと』『午後の曳航』、谷崎潤一郎『細雪』を独訳し、出版している。

ただ、東山魁夷の川端宛書簡（昭和三十年六月二十二日）には、「又友人の奥さんが御著「千羽鶴」を独訳し、その出版につき挿絵を依頼されて居りますので、目下、構図を考へて居ります。」とあり、東山魁夷の友人の妻であったことは分かる。

### ■ 川端康成と八代佐地子・国際ペンクラブ関連略年譜

昭和二十三年六月 川端康成は志賀直哉の後任として、日本ペンクラブ第四代会長に就任した。（昭和四十年十月まで在任）。（『川端康成全集 第三十五卷』所収の「年譜・川端香男里編」より。以下「年譜」）

昭和二十五年四月 広島で「平和宣言」を読み、昭和三十一年十一月にはハンガリー動乱に際して日本ペンクラブ会長名で同情電報を打った。（「年譜」）

昭和三十年五月八日付 川端康成書簡（八代佐地子宛）【鶴見大学図書館蔵・展示資料】

『千羽鶴』をドイツ語に翻訳して出版したいという八代の問い合わせに対する返信。

昭和三十年六月二十二日付 東山魁夷書簡（川端康成宛）【コピー展示】

「友人の奥さんが御著「千羽鶴」を独訳し、その出版につき挿絵を依頼されて居りますので、目下、構図を考へて居ります。」とある。（『川端康成と東山魁夷 響きあう美の世界』川端香男里、東山すみ監修、二〇〇六年九月、求龍堂。以下『川端康成と東山魁夷 響きあう美の世界』）

昭和三十一年六月二十四日付 川端康成書簡（東山魁夷宛）【コピー展示】

「八代さん御夫妻、シンチンガア先生など鎌倉にお招きいたしたく、その日ご都合よろしければ、奥様と御光来いただけると大変幸せです。」とある。（『川端康成と東山魁夷 響きあう美の世界』）

昭和三十一年七月一日付 川端康成書簡（八代佐地子宛）【鶴見大学図書館蔵・展示資料】

八日の来宅を了承する内容。書簡中に「東山さんへも私只今お招き書きました」とあり、東山魁夷にも手紙を書き、招待したことが分かる。

昭和三十一年七月四日付 東山魁夷書簡（川端康成宛）【コピー展示】

「この度はお招き戴きまして誠に有難うございます。当日はお言葉に甘へまして、家内と共に参上させて戴きたく存じます。」とある。（『川端康成と東山魁夷 響きあう美の世界』）

昭和三十一年一月二十三日付 川端康成書簡（東山魁夷宛）【コピー展示】

「上智大学のロオゲンドルフ先生がドイツより帰られてペン例会に出席され、八代さんの独文はドイツで好評の由、聞、先生もこのように美しい独文を書く夫人と会ひたいとの事で私もよろこんで居ります。」とある。（『川端康成と東山魁夷 響きあう美の世界』）

昭和三十二年三月上旬頃と推定される 八代佐知子書簡下書き（川端康成宛）【鶴見大学図書館蔵・展示資料】

#### 蔵・展示資料】

「先生やロツゲンドルフ様に色々とお話をうかぐい本当にたのしい一夜でございました。」とあり、八代はロゲンドルフとともに鎌倉の川端邸に招かれたことが分かる。前項の書簡、および、内容が川端の渡欧直前であることから、三月上旬頃の書簡であると推定される。

昭和三十一年三月二十日付 川端康成書簡（八代佐地子宛）【鶴見大学図書館蔵・展示資料】

渡欧出発直前の書簡である。「ヘツセやJüngerも訪ねるかもしれませんがカアルハンザアには是非参ります」とある。

昭和三十一年三月、国際ペンクラブ執行委員会出席のため松岡洋子とともに渡欧した。（「年譜」）羽田出版は二十二日。（『川端康成詳細年譜』小谷野敦・深澤晴美編、二〇一六・八、勉強出版。以下『詳細年譜』）また、併せて東京大会への出席要請のため、ヨーロッパ、アジアの各国を訪問し、五月に帰国した。（「年譜」）

昭和三十一年三月下旬 八代佐知子書簡下書き（川端康成宛）【鶴見大学図書館蔵・展示資料】

内容から、川端の渡欧出発直後の執筆と認められる。

昭和三十一年四月十五日 夜、ミュンヘンに到着。翌十六日、カールハンザー社を訪れ、社長と会食。その後、トーマス・マンの旧居を訪ねた。なお、ヘルマン・ヘッセとは会えなかったが、エーリッヒ・ケストナーとは会談できた。（『詳細年譜』）

昭和三十三年四月十八日 ロンドンの国際執行委員会に松岡洋子と出席。国際ペンクラブ大会の東京招致を正式に提案、満場一致で賛成を得た。（『詳細年譜』）

昭和三十三年九月二日 第二十九回国際ペンクラブ東京大会を開会。八日、京都での閉会式まで主催国会長の大役を務めた。（「年譜」）

昭和三十三年二月 国際ペンクラブ副会長に選出された。

昭和三十三年八月十二日付 川端康成書簡（八代佐地子宛）【鶴見大学図書館蔵・展示資料】

『山の音』の独訳などについて往復書簡のあったことが分かる。結局、八代佐地子、Oscar Benl（オスカー・ベンル）はともに『山の音』を独訳しなかった。ただし、Oscar Benl の川端作品の独訳は多く、『伊豆の踊子』『再婚者』『十六歳の日記』『舞姫』『雪国』などがある。展示の *Schneeland*（一九五七、カールハンザー社）は、Oscar Benl による『雪国』の独訳である。

昭和三十四年五月 フランクフルトの第三十回国際ペンクラブ大会で、ゲーテ・メダルを贈られた。（「年譜」）

昭和三十五年五月 米国務省の招聘により渡米。つづけて七月、ブラジル・サンパウロで開催の第三十一回国際ペンクラブ大会にゲスト・オブ・オナーとして出席、八月に帰国した。（「年譜」）

昭和三十九年六月 オスローで開催された第三十二回国際ペンクラブにゲスト・オブ・オナーとして出席、帰途、欧州各国を廻って八月帰国した。（「年譜」）

昭和四十年十月 日本ペンクラブ会長を辞任。十八年務めた。十一月、日本ペンクラブ創立三十周年記念祝賀会が催され、席上、後任の芹沢光治良会長その他からねぎらいを受けた。（「年譜」）

昭和四十一年四月 日本ペンクラブ総会の席上、多年の功績に対して、高田博厚制作の胸像が送られた。（「年譜」）

昭和四十三年十一月 前月十七日のノーベル文学賞受賞決定を受け、ペンクラブ主催の受賞記念祝賀会が催された。（「年譜」）

昭和四十五年六月 台北で開催のアジア作家会議へ出席し講演。つづいて六月二十九日から七月三日までソウルで開催の第三十八回国際ペンクラブ大会にゲスト・オブ・オナーとして出席、祝辞を述べた。（「年譜」）

■ 注

東山 魁夷（ひがしやま かいい）一九〇八～一九九九

日本画家。一九三一年東京美術学校卒業。三三～三五年ドイツに留学し、ベルリン大学を修了した。四七年『残照』が日展で特選。幻想的で清純な詩情の作風である。五六年日本芸術院賞受賞、六五年芸術院会員。六八年新宮殿壁画『朝明けの潮』を制作。六九年毎日芸術大賞受賞、同年文化勲章受章。主要な作品に『道』（五〇）、『光昏』（五五）、『秋翳』（五八）、『白夜光』（六五）、唐招提寺障壁画（七五、八〇）などがある。

Robert Schinzinger（ロバートシンチンガー）一八九八～一九八八

ドイツの哲学者。元学習院大学教授、元東京大学教授。戦前に来日した後、京都大学、学習院大学、東京大学教授を歴任し、日本に実存主義哲学を紹介した。四七年には西田幾太郎の『睿智の世界』をドイツ語に翻訳した。四六年、西ドイツから「功労十字章」を受けた。

Joseph Rogendorf（ジヨセフ ロゲンドルフ）一九〇八～一九八二

ドイツの文学研究者。元上智大学教授。カトリックの司祭になるためにイエズス会に入会。一九三五～三七年日本語修得のため来日した。『伊勢物語』などの研究に従事し、上智大学比較文学教授となる。「モニュメンタ・ニッポニカ」の編集、「ソフィア」の創刊に尽力し、太平洋戦争の空襲の際は大学の建物を消火活動によって守り通した。七九年退職。主著に「現代思想とカトリシズム」（五九年）、「日本と私」（七二年）、「異文化のはざま」（八三年）などがある。

Ernst Jünger（ヘルンストユンガー）一八九五～一九九八

ドイツの小説家、評論家。第一次世界大戦従軍の体験に基づいた日記文学『鋼鉄の嵐のなかで』（一九二〇）、『内的体験としての戦争』（二二）、『火と血』（二五）、『総動員』（三一）、『労働者』（三二）などで戦争と全体主義思想を賛美し、ドイツ・ファシズムの開拓者とみられたが、ナチスを容認せず、三九年には神話的幻想的な形式の反ナチス小説『大理石の断崖の上で』を書いた。八二年ゲーテ賞受賞。

Hans Egon Holthusen (ハンス エゴン ホルトウーゼン) 一九一三～一九九七

ドイツの詩人、批評家、随筆家。第二次大戦に従軍、四五年ナチズム支配に反抗し「自由行動バイエルン」に参加した。六一年ニューヨークに移住し文筆活動に専念、カトリック実存主義の立場で戦争体験を歌った「ここで、この時に」（四九年）、「迷路の年月」（五二年）を発表し詩人として認められた。評論に「超越なき世界」（四九年）、「晩年のリルケ」（四九年）、「個人のための弁護」（六七年）などがある。

Hermann Hesse (ヘルマン ヘッセ) 一八七七～一九六二

ドイツの詩人、小説家。若き日は詩作に励んだが、一九〇〇年スイスのバーゼルに移ってからは小説を書きはじめた。〇四年『ペーター・カーメンチント』で成功を収め、〇六年には代表作『車輪の下』を出版した。一三年にはスイス国籍を得た。主著に『デミアン』（一九）、『荒野の狼』（二七）、『ガラス玉演戯』（四三）など。四六年ノーベル文学賞受賞。

Erich Kästner (エーリッヒ ケストナー) 一八九九～一九七四

ドイツの詩人、小説家。第一次大戦後、詩作や評論に活躍し、一九二七年、時代を風刺する抒情詩集『腰の上の心臓』で認められた。少年小説も著し、『エーミールと探偵たち』（二九）、『飛ぶ教室』（三三）などがある。小説『ファービアン』（三三）と詩集がナチスの弾圧で焼かれ、国内での出版活動も禁止された。第二次大戦後、再び風刺詩や少年小説に活躍した。西ドイツ・ペンクラブ会長を長期間つとめた。戦後の作品には、詩集『日日の雑録』（四八）、児童向けの『二人のロッテ』（四九）などがある。

## 昭和十二年五月十五日付川端康成書簡（中河与一宛）解説

中河与一（なかがわ よいち）

明治三十（一八九七）年二月二十八日〜平成六（一九九四）年十二月十二日

小説家。東京（戸籍上は香川県）生。早稲田大学英文科中退。川端康成、横光利一等と共に、雑誌「文芸時代」の創刊（大正十三・十）に参加。新感覺派として活躍し、反マルクス主義の評論を書いた。戦時下は民族主義に傾いた。川端康成とは文壇デビュー以来、交際が続いた。『刺繍せられた野菜』（大正十三）、『形式主義芸術論』（昭和五）、『愛恋無限』（昭和十・十一）等。代表作『天の夕顔』（昭和十三）は各国語訳され、西欧諸国でも高い評価を得、アルベール・カミュから激賞された。

菅忠雄（すがただお）

明治三十二（一八九九）年二月五日〜昭和十七（一九四二）七月九日

小説家、編集者。東京生。上智大学中退。「文芸春秋」「オール読物」の編集長を務めた。父・虎雄は一高ドイツ語教授で、夏目漱石と親しかった。父を通して芥川龍之介、久米正雄、菊池寛を知り、文芸春秋社に入社した（大正十三）。川端康成、横光利一等と共に、雑誌「文芸時代」の創刊（大正十三・十）に参加、創刊号に『銅鑼』を発表したが、その後は寡作で、主に編集者として活躍した。昭和十一年以降、結核で病臥した。

なお、川端康成の妻・秀子夫人は、菅忠雄夫妻の家で手伝いをしていたことがあり、そこで川端と知り合った（大正十四年五月頃）。その翌年には、留守宅となっていた菅宅で生活を共にすることとなった。

書簡は、菅忠雄への見舞金を取りまとめる役にあつた川端康成が、中河与一に宛てた札状である。

書中の「十一谷君」は、十一谷義三郎（じゅういちやぎさぶろう 明治三十「一八九七」・十・十四〜昭和十二「一九三七」・四・二）のこと。やはり、「文芸時代」の創刊（大正十三・十）に参加した小説家で、代表作に『唐人お吉ーらしやめん創生記ー』（昭和四）などがある。十一谷は前月の四月二日に結核で死去した。

「無限抱擁」は、小説家・瀧井孝作（たきい こうさく 明治二七〔一八九四〕・四・四〇昭和五九〔一九八四〕・十一・二十二）の代表作。昭和二年刊。書中の言及は、「読売新聞」（昭和十・十・二十一朝刊）に発表された川端の『瀧井孝作氏の「無限抱擁」』（コピー展示）を指すものと思われる。ここで川端は、「その強靱な真実は太古の無垢に通じるものがある。この作品と並べて、虚飾の剥げぬ恋愛小説は容易に見つかるまいと思われる。」と絶賛した。

書簡中の『髭』は、昭和八年七月「文芸春秋」に発表された短編小説。

「日本短篇選」の企画については、不明である

## 書簡翻刻

八代佐地子宛 川端康成書簡

消印 昭和30年5月9日

東京都大田区山王一丁目二七二〇

八代佐地子様

鎌倉市長谷二六四

川端康成

五月八日

拝復 私の千羽

鶴を御翻譯

下さるのは結構

なのですがもし

ドイツでの出版な

どが捗らぬ時の

非常な御迷惑

をかける事になり

ますのでお返事

をためらつて居

りました

五月八日 川端康成

八代佐地子様

消印 昭和31年7月2日

東京都大田区山王二丁目二七一〇

八代佐地子 様

鎌倉市長谷二六四

川端康成

御返事難有く

拝見いたしました

八日御待ち申し上げます

三時半か四時ごろ

如何でせうか東山さん

へも私只今お招き

書きました格別

おもてなしもありま

せんのでせめて天

気がよければと思

つて居ます

御主人様によろしく

お傳へ下さい

七月一日 川端康成

八代佐地子様

消印 昭和32年3月21日

東京都大田区山王一丁目二七二〇

八代佐地子 様

鎌倉市長谷二六四

川端康成

三月二十日

拝復 御親切難有

く存じました

言葉が出来な(?) 通訳

つきなのでペンの関係

用件●以外は余り

人に会ひませんつも

りですがあるひはへ

ツセや Jinger も訪ねるか

もしれませんカアルハンザア

には是非参ります

三月二十日 川端康成

八代佐地子様

先夜はまことに難有く

存じました

珍しいと思ひますので支

那風の封筒と紙文に独

訳お添へいただけるとさはいはい

です、郵税千円失礼ながら

同封いたしました

三月二十日 川端康成

八代佐地子様

消印 昭和33年8月13日

東京都大田区山王一丁目二七二〇

八代佐地子 様

鎌倉市長谷

川端康成

8月12日

拝復 再てありがた

く存じます 山の音

もし獨訳するやう

でしたら訳者とし

てあなたを考へて

くれるようハンザア社

に申しますしかし

日本語を讀んでみて

分かるのがもしOscar Benl氏

で同氏が自訳すると

ハンザア社に申し出た時

今は私として御否みにくい

とも思ひます 山の音に

限らずまた私の作品と

限らず独訳に適する

ものを概説または一章

訳をつけてハンザア社に

お送り下さるといふやう

な事もいかゞでせうか

一度お目にかゝつてさうい

ふ事もお話いたしたい

と存じます 残暑お大

事になさつてくださいご主人様

によるしくお傳へ下

さいませ

八月十二日 川端康成

八代佐地子様

八代佐地子 川端康成宛書簡 下書き

この間はおいそがしい処わざ／＼お招きにあづかり本当に有難うござ  
ました厚く／＼御礼申し上げます 先生やロッゲンドルフ様に色  
色とお話をうかがい本当にたのしい一夜でござりました 何何

先生の（御出発も）いよ／＼近づき何やかとおいそがしい事と存じます。何か  
お手傳い申上げる事がござりますればどうぞ

御遠慮なくお申しつけ下さいませ。あの時一寸ヘツセのお話が出ま  
したが、若しお余會いになる御意志がああおありにならぬのでございな

私もよく存じております方で（この人はご存じのシンチンガー先生の後輩です）  
れば今東京大学●で教えて居れるドイツ人の先生がよく知って居られ●ので

一寸お電話でもいただければ聞いておきます

らしく紹介状及び住所をいただける事と思います。又現在ドイツの  
エッセイストとして有名なエルンスト Jungar にお會いになるのも大変いゝ  
事だと思えます。この人も東洋及び日本に大変興味をもつてゐる

人でござります。ドイツに行かれて色々な作家にお余いにならぬ場合（カアルハンザを）利用に  
カールハンザーには●私からドイツにおいでになる事を知らせておきま  
しょう。色々な事なればよいと思えます。出来るだけの事はしてくれ  
る事と存じます。

ではよい御旅行をなさいます様心からお祈り申上げて下ります。

末筆ながら御奥様にも呉々もよろしくお疲れ●がお出にならない  
様お願い申し上げます。

速達及び

なさる

おくれげながら先生のお元気●に御出発のお姿を  
羽田空港のボルクナー・フィンガーより拝見●●さして頂きました。

先生にお便り申し上げてすぐ例の先生(クナウス様)  
に電話し、先生が●●へツセへの手紙をお願い

致しましたが、其の日の内に速達で出して下

さいましたはずなのに、先生の御出発の

朝までとどかず、~~木~~木九時頃まで待ち

ましたが来ないので羽田まで●いそいで参り

ましたが、先生にも直接お目にかゝれず本

当に残念な事を致しました。

羽田より帰りました処先生の~~手~~手紙、

二通を受取りました。カールハンザーへの手紙

は早速譯してお送り致しますよう。

へツセへの紹介状(クナウス●さんのお言葉に

よればは自分の様な青二才が先生を紹介申し上

げるのは気が引けると申されてましたが)を

同封致します。Ernst Jünger は München に

又 Dr. Egon Holthusen は今日ドイツの有名な評論家です。

この方はたしか München にお住いと思えます。若し

ハイデルベルグへおいでなれば以前日本にも

居られ、シンチンガー先生とも大変親しかつ

た Dr. Diebel Sechel さんがハイ●デルベルグの大学で

教えてられます。この方は日本語もお出来

になりますし、日本美術には大変精通

して居られる方です。(私は直接存じ上げて居

りません)●●ハイデルベルグの案内其の他色

々と親切にして下れると思えます。

ではどうぞよいお旅行をおつづけになる様

お祈り致して居ります。

消印 昭和12年5月16日

東京都世田ヶ谷区祖師ヶ谷二丁目

中河與一宛 川端康成書簡

中河與一様

鎌倉市浄明寺宅間ヶ谷

川端康成

拝復、お手紙拝見、為替拝受、菅君見舞の件に関して

ハ連日気がかりなら、小生例の怠慢にて集めるの怠け、明日

はと思ひつつ今日に到つて居ます。先づお送り下され、これにてどう

あつても至急他の者も集め、五名百円にして近々菅君に

送●金します。鞭撻下さつた様で深謝の到りです。菅

君はさほど悪いわけでもありませんか、慶應退院後もはかばか

しくなく、時々熱など出し、数日前仙台東北帝大の附属病院

へ入院しました。遠方の病院で可笑しいですが、なんでも結核の名

医がゐると●？のことです。知人もない土地で反つてよいかと思はれます。

十一谷君を見ても不養生の死、出来るだけ仰々しく徹底的にやれ

ばよいでせう。見舞金は仙台の方へ送ります。家をしめて、奥さん

も行きました。お互ひに体は大切にしたいと御自愛祈ります。

報知は失敗でせうが、何とか無事に書き続き、二百回ばかりに致します。

信州の随筆風の小説に手をつけ毎月その方面へ参る心中。秋には琉球を

書きに旅行します。ホルモンを続け、かしてもたりたいと●念じながら、

相変わらずです。一度鎌倉へお遊びに来られませんか。十円会はこれ

も誰かがきめて依すと集るのでせうが、一つ勝手に大兄やつていただけ

ませんか。暑くなるまでに一度集りたいものです。右お禮とお詫び

まで。 五月十五日

川端康成

中河與一様

無限抱擁に就ては、十雑誌の十よくとした誤評であらうかと思ひ

ますが、御見せするのも恥しい次第。日本短篇選のことに、御作●髭その

他最近拝読いたしました、頁数の都合で、私達の時代にまで及べます場

合は、髭お●借し願いたいと思つてゐます。